第九講　『晋書』／『冥報記』

一　次の漢文は、東晋の王羲之が、永和九（三五三）年三月三日、会稽（今の中国の浙江省にある）郊外にある蘭亭で近隣の名士たちと集い、曲水の宴を催した際に、人々が作った詩をまとめ、その序として書いたものです。この文章を読んで、後の設問に答えなさい。ただし、設問との関連で、送り仮名・返り点の一部を省略してあるので注意しなさい。

永和九年、歳在癸丑。［ 1 ］、会于会稽山陰之蘭亭、修禊事也。群賢畢至、①少長咸集。此地有崇山峻嶺、茂林修竹。又有清流激湍、映帯左右。引以為流觴曲水、列坐其次。雖無糸竹管絃之盛、一觴一詠、亦足以暢叙幽情。是日也、天朗気清、恵風和暢。仰観宇宙之大、俯察品類之盛。所以遊目騁懐、足以極視聴之娯、信可楽也。夫人之相②与俯仰一世、或取諸懐抱、悟言一室之内、或因寄所託、放浪形骸之外。雖趣舎万殊、静躁不同、当其欣於所遇、暫得於己、快然自足、③不知老之将至。及其所之既倦、情随事遷、感慨係之。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

矣。向之所欣、④俛仰之間、已為陳跡。⑤猶不能不以之興懐。況修短随化、終期於尽。古人云、死生亦大矣。⑥豈不痛哉。毎覧昔人興感之由、若合一契。⑦未嘗不臨文嗟悼、不能喩之於懐。固知、一死生為虚誕、斉彭殤為妄作。後之視今、亦⑧猶今之視昔。悲夫。故列叙時人、録其所述。雖世殊事異、所以興懐、其致一也。後之覧者、亦将有感於斯文。

〔注〕
○癸丑――みずのとうし。その年を干支で言ったもの。
○修禊事――三月三日の禊（みそぎ）の行事をおこなう。　○崇山峻嶺――高い山や険しい峰。
○茂林修竹――茂った林や長く伸びた竹。　○激湍――急流。
○映帯左右――辺りに映えている。　○流觴曲水――盃を流す曲がりくねった流れ。觴は、盃。
○暢叙幽情――深遠で高雅な思いを存分に述べる。　○恵風――おだやかな風。
○宇宙――天地。また天空。　○品類――万物。　○取諸懐抱――心に抱く思いを表出する。
○悟言――向かい合って語る。
○因寄所託――自らが託するものにまかせる。
○放浪形骸之外――肉体を忘れて心を自由に遊ばせる。形骸は、肉体。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

○趣舎――取捨選択。人生の過ごし方をいう。
○静躁――静と動。　○所遇――境遇。
○快然――気持ちのよいさま。　○陳跡――過去の事。　○修短――寿命の長短。
○化――天地万物の変化。　○期――決まっている。　○興感――感慨をもよおす。
○合一契――割り符が合う。　○嗟悼――嘆き悲しむ。　○一死生――生と死を同一視する。
○虚誕――いつわり。　○斉彭殤――長寿と夭逝とを同じと考える。
○妄作――いい加減なつくりごと。
○列叙時人――この日、蘭亭に集まった人々の名を列挙する。
○斯文――蘭亭に集まった人々が作った詩文。　○出典は、『晋書』王羲之伝。

問一　［1］には「旧暦三月上旬の頃」を表す語が入る。最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　陽春之候　　イ　暮春之初
ウ　仲春之候　　エ　孟春之初

問二　傍線部①「少長」のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　年かさの少年たちは　　イ　やや年輩の人々は
ウ　年若い長(おさ)たちは　　エ　老いた者も若い者も

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　傍線部②「与」のここでの読み方として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　与（あた）へて　　イ　与（とも）に
ウ　与（ため）に　　エ　与（よ）りは

問四　傍線部③「不レ知二老之将レ至」（返り点のみ施してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　老いが我が身にやがて訪れることも忘れている
イ　老いてどのように我が身を処してよいのかもわからない
ウ　老いがどのように訪れるのかは予測できない
エ　老いてやがてあの世に行き着くのだとは考えない

問五　傍線部④「俛仰之間」（俛は俯と同じ）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　広大な空間にわたって
イ　つかの間のうちに
ウ　悠久の時間をかけて
エ　わずかの隙間もなく

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　傍線部⑤「猶不能不以之興懐」（「そのために人の心に感慨を生じさせずにはおかない」という意）を訓読する際に施す返り点として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　猶不レ能レ不二以レ之興一レ懐

イ　猶レ不レ能不二以レ之興一レ懐

ウ　猶下不レ能二不以一レ之興上懐

エ　猶不二能不レ以レ之興一レ懐

問七　傍線部⑥「豈不レ痛哉」（返り点のみ施してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　どうして痛ましいことがあろうか　　イ　痛ましくないわけではない

ウ　何とも痛ましいことではないか　　エ　痛ましくないのはなぜか

問八　傍線部⑦「未嘗不臨文嗟悼、不能喩之於懐」（「古人が残した文を前に痛み嘆かずにはいられないが、その理由を我と我が心にもさとすことができない」の意）の書き下し文として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　未(いま)だ嘗(かつ)て文(ぶん)に臨(のぞ)めば嗟悼(さたう)す、之(これ)を懐(こころ)に喩(さと)ること能(あた)はざらん

イ　未(いま)だ嘗(かつ)て文(ぶん)に臨(のぞ)みて嗟悼(さたう)して、之(これ)を懐(こころ)に喩(さと)ること能(あた)はずんばあらず

ウ　未(いま)だ嘗(かつ)て文(ぶん)に臨(のぞ)みて嗟悼(さたう)せずんばあらざるも、之(これ)を懐(こころ)に喩(さと)ること能(あた)はず

エ　未(いま)だ嘗(かつ)て文(ぶん)に臨(のぞ)みて嗟悼(さたう)せず、之(これ)を懐(こころ)に喩(さと)ること能(あた)はず

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問九　傍線部⑧「猶」のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。なお、「猶」を含む句には返り点のみ施してあります。

ア　それでもまだ～だ　　イ　ちょうど～のようだ
ウ　意外にも～だろう　　エ　そもそも～だ

問十　本文の内容と合致するものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　好天気に恵まれ、美しい山や水流といった絶景もみごとな中、曲水の宴は、楽の音もにぎやかに、詩を詠じたり酒を飲んだり、実に心楽しいものであった。

イ　筆者は、この曲水の宴で詠まれた詩やこの序を後世の人々が見ても、実際に宴に加わった筆者たちの感動そのものをわかってはもらえないだろう、と諦めている。

ウ　筆者は、晴れやかな曲水の宴を心から楽しんでいたが、ふと誰しも老いや死の愁いから免れないという思いに駆られ、どんな楽しみも色あせ過去のものとなっていくものだと感じている。

エ　筆者は、人はそれぞれ志や生き方に違いはあれ、自分の境遇に満足して生きることによってこそ、老いと死の愁いから免れることが可能だと期待を示している。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送り仮名を付していないところがある。

夫含気有生、無不有識、有識而有行、随行善悪而受其報。如農夫之播植、随所植而収之。此蓋物之常理、固無所可疑也。[X]ハ達其本源、知而1無見、下愚闇其蹤跡、迷而不返、皆2絶言也。中品之人、未能自達、随縁3動見、遂生疑。疑見4多端、各懐異。執釈典論其分別、凡有六十二見。邪倒於是乎生者也。

臨在5中人之後。幸而寤其6万一。7比見衆人不信因果者説見雖多、同謂善悪無報。無報之説、略有三種。一者自然。故無因果。8唯当任欲待事而已。二者滅尽。言、死而身滅、識無所住。身識都尽、誰受苦楽。以無受故、知無因果。三者無報。言、見今人有修道徳、貧賤則早死、或行凶悪、富貴霊長。以是事故、知無因果。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

臨窃(ひそカニ)謂(おもフニ)、儒書論(ズルコト)二善悪之報(ヲ)一甚(ダ)多(シ)。O近者報(キハ)(イ)二於当時(ニ)一、P中者報(ナルハ)(イ)二於累年之外(ニ)一、Q遠者報(キハ)(ユ)二於子孫之後(ニ)一。

（『冥報記』序）

〔注〕○気――万物生成の根源　○識――認識　○播植――種まくことと苗を植えること
○蹤跡――行動のあと、事蹟(じせき)　○釈典――仏典　○六十二見――六十二の異端の説
○臨――冥報記の撰者、唐臨の自称

問一　本文冒頭では、何を何に例えているか。次の中から適切なものを二つ選べ。

a　「気」を種に例えている。　b　「善悪」を「常理」に例えている。
c　「報」を収穫に例えている。　d　「識」を「農夫」に例えている。
e　「行」を「播植」に例えている。

問二　空欄 X に入る語として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

a　上智　b　上品
c　上戸　d　上愚

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　傍線部１「無見」、傍線部３「動見」の「見」はどういう意味か。次の中から最も適切なものをそれぞれ一つ選べ。

a　面会　　b　出現方法　　c　認識作用一般　　d　誤った見解

１＝　　　　３＝

問四　傍線部２「絶」、傍線部７「比」と同じ字義で用いられているものはどれか。次の中から最も適切なものをそれぞれ一つ選べ。

２　a　絶技　　b　絶交　　c　絶後　　d　絶海　　e　気絶

７　a　比定　　b　比況　　c　比肩　　d　比来　　e　無比

問五　傍線部４「多端」、傍線部６「万一」はそれぞれどういう意味か。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

４　a　複雑多岐　　b　多事多忙　　c　多情多恨　　d　好事多魔

６　a　ひょっとして　　b　端から端まで　　c　ほんの少し　　d　偶然

問六　傍線部５「中人之後」とはどういう意味か。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

a　中品の人の子孫　　b　中品の人の背後

c　中品の人の末席　　d　最後の中品の人

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問七　傍線部８の書き下し文として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。（※筆者注：選択肢入試問題そのままです）

ａ　ただ任に当たりて事を待たんと欲するのみ。
ｂ　ただまさに事を待ちて欲に任すべきのみ。
ｃ　ただまさに欲に任せ事を待つべきのみ。
ｄ　ただ任に当たり欲は事を待つのみ。

問八　唐臨は、二重傍線部「無報之説」として三種を挙げ、その理由を述べているが、これに当てはまらないものを、次の中から二つ選べ。

ａ　人類が消滅すれば、苦楽を享受する者も消滅するから。
ｂ　道徳を修養しても貧しければ早世し、凶悪なことをしても裕福ならば長寿であるから。
ｃ　死んで身体がなくなれば、苦楽を認識することもないから。
ｄ　あるがままの自然に因果関係などあり得ないから。
ｅ　身分の低い有徳者より、身分さえ高ければ凶悪犯の方が長生きするから。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問九　以下の例は、傍線部Ｏ「近者」、傍線部Ｐ「中者」、傍線部Ｑ「遠者」のどの例に当たるか、それぞれ答えよ。

ａ　始皇帝が暴虐であったために子孫が滅んだ。
ｂ　先祖が職分を全うしたので、孔子は儒教を天下に広めることができた。
ｃ　楚の恵王が臣下をかばって蛭を飲み込んだところ持病が治癒した。
ｄ　孫叔敖は幼い時、目にすると死ぬという両頭の蛇を殺し、他人の目に触れぬように埋めたところ、後に大出世した。
ｅ　宋の襄公が行うべき祭祀を捧げなかったところたくさんの隕石が墜ちた。

ａ＝
ｂ＝
ｃ＝
ｄ＝
ｅ＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第九講

①「請（まねキ）二旅人ヲ一、相与娯楽ス。」の傍線部の読み方を、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

②「無少長愚智、皆知ルモレ高キヲ、…」の傍線部を現代語訳せよ。

③「母老多二疾病一。未三嘗離二左右一。」の傍線部をすべて平仮名（現代仮名遣い）で書き下せ。また、現代語訳せよ。

④「未嘗不束帯」を書き下し文にせよ。

注　束帯…「束帯す」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第九講】

〔模範解答〕

一

問一　イ　**問二**　エ　**問三**　イ　**問四**　ア　**問五**　イ
問六　ア　**問七**　ウ　**問八**　ウ　**問九**　イ　**問十**　ウ

二

問一　c・e　**問二**　a　**問三**　1＝d　3＝c　**問四**　2＝a　7＝d
問五　4＝a　6＝c　**問六**　c　**問七**　c　**問八**　a・e
問九　a＝Q　b＝Q　c＝O　d＝P　e＝O

※問七に関して。正しい書き下し文は「唯だ当に欲に任せ事を待つべきのみ。」ですが、この選択肢の中から選ぶのであれば、Cが妥当と判断する。

〔現代語訳〕

一

永和九年、癸丑の年。暮春の月〔＝三月〕の上旬の頃、会稽の山陰の蘭亭に集まり、三月三日の禊の行事を行うのである。賢人たちが皆至り、老いた者も若い者も皆集まった。この地には高い山や険しい峰、茂った林や長く伸びた竹がある。また清流や急流もあって、辺りに映えている。（川の水を）引いて盃を流す曲がりくねった流れとし、順番に座る。弦楽器や管楽器のにぎやかな音楽はないけれど、酒を飲みつつ詩文を詠めば、また深遠で高雅な思いを存分に述べることができる。この日、天は晴れて空気は清く、おだやかな風がのどかである。仰いで天空の大きな様子を見、うつむいて万物の盛んな様子

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

を察知する。ものを眺めて想いを巡らせる手段であり、それによって見たり聴いたりする楽しみを極めることができるのは、真に楽しむべきである。そもそも人が同じ時代に生きていると、あるいは心に抱く思いを表出して、一室の中で向かい合って語ったり、あるいは自らが託するものに任せたりして、肉体を忘れて心を自由に遊ばせる。人生の過ごし方もさまざまで、静かな人もいればにぎやかな人もいて同じではないが、その（自分の置かれた）境遇を喜び、しばらく自分を得ると、気持ちがよく自分で満足し、老いが我が身にやがて訪れることも忘れている。行く〔＝人生を過ごす〕ことに既に疲れ、気持ちが物事によって変化すると、感慨がまとわりつく。さっき喜んでいた事は、つかの間のうちに、既に過去の事となる。そのために人の心に感慨を生じさせずにはおかない。ましてや寿命の長短は天地万物の変化に従い、最終的には死ぬに決まっていることは言うまでもない。古人が言うには、生死もまた大問題だと。（死は）何とも痛ましいことではないか。昔の人の感慨をもよおした理由（を述べた文章）を見るたびに、割り符が合うよう〔＝自分とぴったり〕だ。古人が残した文を前に痛み嘆かずにはいられないが、その理由を我が心にもさとすことができない。もともとわかっている、生と死を同一視することはいつわりであり、長寿と夭逝とを同じだと考えるのはいい加減なつくりごとであると。後代（の人）が現代（の人）を見るのも、また現代（の人）が過去（の人）を見るのとちょうど同じようなのだ。悲しいことよ。だから、この日、蘭亭に集まった人々の名を列挙して、彼らの作った作品を収録する。時代が違い事物が異なったとしても、感慨をもよおす理由は同じなのである。後代の読む者も、またこの文〔＝この日、蘭亭に集まった人々が作った詩文〕に感慨を抱くであろう。

二

そもそも万物生成の根源の気を含んで生命が生存するならば、認識が存在しないことはなく、認識が存在して行為があるならば、行為の善悪に応じてその報いを受ける。農夫が種をまき苗を植えて、植えた場所に応じてこれを収穫するかのようだ。このことは思うにものの一定不変の法則であり、本来疑うことのできないものである。最上の賢者はその根本原理に通達しているので、（真理を）理解して誤った見解がなく、最低の愚者はその人自身の行動のあとに通じておらず、迷って戻って来ない〔＝真理に到達できない〕というのは、すべてこの上なく優れた言葉である。中間に位置する人は、まだ自分では

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（真理に）通達できないので、きっかけに応じて認識作用一般を揺れ動かし、とうとうその認識作用一般が（真理への）疑いを生み出す。疑いと誤った見解とは複雑多岐であるから、それぞれに異なった（考え）を抱く。仏典を手に取りその考えを区分すると、全部で六十二の異端の説がある。間違った考えはかえってこういうところから生まれてくるものなのである。

私（＝唐臨）は、中間の人の末席にいる。幸いにも（真理のうち）ほんの少しを悟った。近頃多くの人々で因果を信じない者を見ると（それらの人々の）見解は多いが、同じように善悪の行為に（応じた）報いはないと言う。報いがないという主張には、おおむね三種類がある。一つ目は自然説（＝人は思うがままに振舞うのが正しい）。だから因果（応報）はない。ただ当然欲望に任せて事物に対応するだけである。二つ目は滅尽説。言わんとするところは、死んで身体がなくなれば、認識が宿るところもなくなる。身体と認識とがすべてなくなれば、誰が苦楽を受けようか、いや、受けない。受ける者がないことから、因果（応報）がないことが分かる。三つ目は無報説。言わんとするところは、今（の世）の人を見ていても道徳を修めていても、貧困で身分が低ければ早死にし、ある者は凶悪を行っても、富裕で身分が高ければ幸福が長く続くのである。こうした事情から、因果（応報）がないことが分かる。

私（＝唐臨）が個人的に思うことだが、儒家の書物は善悪の報いを論じることが非常に多い。近いものは（行為を行った）その時に報いがあり、中間であるものは年を積み重ねた後に報いがあり、遠いものはその子孫に報いがある。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答解説　第九講

〔解説〕

① 「与」の読み方はたくさんあるが、「相与」の場合は「あヒともニ」と読み、「互いに・共に」の意味。

② 「少」は（単独では）「わかシ」と読み、「若い・年少」の意味（ここでは「少長（しょうちょう）」）。傍線部の「少長」が「年少・年配の者」、「愚智」が「愚者・智者」の意味。ここではそれを「無」で否定しているので、それらが関係ないということ。

③ 「未嘗～」は「いまダかつテ～ず」と読み、「今まで一度も～ない」という意味。「左右」は重要単語で「側近」という意味があるが、ここでは「母親が年老いて病気がちだ」という文脈上、「左右」⬇「そば・かたわら」の意味。

④ 「未嘗不～」は「いまダかつテ～ずンバアラず」と読み、「今まで一度も～しなかったことはない・いつも必ず～する」という意味。「束帯す」は、「ず」に接続するので未然形「束帯せ」に活用させる。「～ずんばあらず」の読みに気を付ける。「今まで一度も正装しなかったことはない・いつも必ず正装する」という意味。

〔解答〕

① ともに　② 年少の者も年配の者も、愚者も智者も関係なく、

③ いまだかつてさゆうをはなれず。

〔現代語訳〕 今まで一度も（病気がちな母の）そばを離れたことはない。

④ 未だ嘗て束帯せずんばあらず

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。